

大学オーケストラで、教えることの醍醐味をひしひしと感じた伊藤岳雄先生。国際スズキ・メソッド音楽院を経て、兵庫、大阪で8年目を迎えた。月一度の合奏会に加え、音楽祭への参加、夏期学校への参加、そしてクラス合宿と盛りだくさんメニューで活動している。

# アンサンブルで、横のつながりを広げたい

チェロ科 伊藤岳雄先生クラス

お揃いのTシャツで  
調弦に並ぶ生徒さんたち



## ★44 教室めぐり 兵庫・大阪

- ・大阪市阿倍野区阿倍野筋 3-2-10
- ・池田市栄町 9-9 ウィズ幼児教室池田校
- ・高槻市高槻町 11-16 領家ビル 2F
- ・神戸市東灘区森南町 1-11-17 森南ふれあい会館

5月のある土曜日、朝早く伊藤岳雄先生の阿倍野教室を訪ねた。話題の、あべのハルカスが高くそびえる商業地域から一歩中に入った住宅地の広々とした教室。夕方6時頃まで8組の生徒、1組の見学生のレッスンが続いた。いずれも幼稚園生〜小学校高学年の「若い」クラスだ。まずは、スケール練習。二長調、ハ長調、変ロ長調と、生徒のレッスン曲に合わせて変化する。その時に伊藤先生は、生徒の後ろに回って、手で背中をぐりぐり。背骨をまっすぐにする感覚を直接伝えていた。「スケールがちよつと変だと思ったら、やり直そう」と間髪入れず指摘。「音程は肘で作ろう」と左肘が下がることで音程が悪くなることも必ず伝えていた。

笑顔が絶えない指導を展開される中、ポイントとなる大切な部分は、絶対に妥協されない様子。取材しているこちらもレッスンを受けている感じがしてきた。  
この感覚、どこか既視感があると思ったら、伊藤先生が6歳の時から高校3年まで指導を受けられた中島顕先生(東海地区チェロ科指導者の秀囲気そのもの。生徒が弾いた音に対して、「上手だった?」とか「今のは下手になる練習だったね」など中島先生がよく口に出される発問が続く。事実、伊藤先生はレッスン中に「先生も中島先生から2年前に同じことを言われました。左の肘を下げて練習してもうまくならない、3倍練習してもダメ」とその伊藤先生、小学生の頃は練

習が嫌で、真剣にやめたいと何度も思ったという。「こんなに弾けるのだから、もう少し続けたい」と親戚から助言されたのもこの頃。事実、普段の練習は嫌でも、夏期学校と東海地区の先生が勢揃いする合宿の楽しさは格別だった。朝6時に起きて、ご飯以外は夜までの練習が3日間続く。上級生になると夜中の12時までチェロアンサンブル。スズキを卒業してからも、合宿は毎回参加してきた。好きでやっている自覚と、やめたい気分がせめぎあった中学時代、やめるきっかけがなかった高校時代を過ぎ、高校3年の5月に、クラスで初めて開かれたソロ演奏会に出演。「自分なりに目標をやり遂げ、引満退社になりました」という。



背中をぐりぐり。「今年は6巻を卒業録音しよう。まずは5巻のヴィヴァルディを1日に何回か弾こう。毎日2時間だよ」



分楽器が大きくなる生徒に「いい音でしょう。早く大きくなるといいね。指を広げる練習ができるよ」



東京、名古屋のスズキで習っていた生徒さんが見学。写真は、肘の高さについて指摘しているところ



ボクレー二の協奏曲を1週間で仕上げてきた生徒。「録音する時には、95%くらいの完成度を目指す」



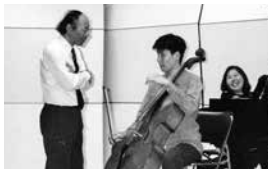
合奏会は、母親たちの会場探しのサポートが不可欠。この日は、事前に年に一度の総会が開催された



室内楽にのめり込んでいた音楽院時代。佐々木孝子先生(甲信地区ヴァイオリン科指導者)の卒業演奏会では、ピアノ科の明子先生(奥様)とも共演



小学生時代の伊藤先生



高校3年の独奏会リハーサルで中島先生、ピアノの佐古玲子先生と。シューマンのチェロ協奏曲、ポッパーのハンガリー狂詩曲などを演奏した



合奏会のピアノ伴奏は伊藤明子先生。地域の音楽祭への出演も多い

同志社大学文学部心理学科に進んだものの、音楽活動は京都大学交響楽団が主な活躍の場。チェロパートをより良くしようと励む中で、パートの首席になり、仲間や後輩たちへの指導に手応えや喜びを感じていた。「スズキの看板を掲げて、教室を持ちたい」という願いがむくむくと湧き上がったのもその頃。大学をやめ、国際スズキ・メソッド音楽院生としての生活を始めた。同じ道を歩む仲間たちから、「ほめて育てるスズキ・メソッド」という言い方をその時初めて知ったという。そのくらい、中島先生からほめられた記憶がない。音楽院では、豊田耕児先生、林峰男先生らから徹底的に鍛えられ、フレーズの捉え方、音の終わ

りなど音楽が見えるようになった。2007年に縁あって北大阪支部で教室を開き、2年前に独立してからは母親たちの惜しみない協力のもと、日々の指導に情熱を注ぐ。「練習は厳しいと思いますが、可能な限り、帰りは楽しい気分です」器を鳴らしきること。できないところをできるようにする部分練習は5回続けてできることが肝心です。「親しいヴァイオリン科指導者たちの教室とのアンサンブルも、これからの課題だ。「横のつながりを軸に活動を広げたい。その意味で自己主張しつつも、バランス感覚に溢れたプロセスと演奏が大切。人間教育であることの現れですね」

